

シロクロ (SHIRO×KURO)

弓月 キリ

月夜のよろず屋

目次

プロローグ	6
1. 日常	7
2. 対峙	10
3. 別個体	14
シロとクロ	18
エピソード	22
あとがき	26

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる環境により、表示の差が認められることがあります。

本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のものです。作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場する場合がありますが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

なお、発行している小説本やグッズは、すべて自分で製本・制作しています。（全てコンビニプリントやセルフプリントで印刷し、自分で平綴じ製本またはフリーソフト等を使って電子書籍データへの変換をしております）

そのため、乱丁・落丁・あまりにもひどい汚れ等がありましたら、お取替えさせていただきますので、弓月キリまでメールかTwitterのDM等にてお知らせください。

読んでいて気になりそうな汚れや不揃いの部分、ズレなどではできるだけように配慮して印刷・製本・制作しておりますが、本文に影響のない軽微な汚れやズレなどは何卒ご容赦いただけますと幸いです。

プロローグ

白い膝丈のワンピースに白いサンダル。腰近くまである白くて長い髪。陶器のように白い肌と微笑みを持つ、暗闇にでも映えそうな女性の灰色の瞳は『黒』を映している。

黒いパンツスタイルに黒いパーカー、黒いスニーカー。短くて黒い髪。健康的な色をした肌と無表情を持つ、暗闇に溶け込みそうな男性の黒い瞳は『白』を映している。

——ああ、どうして。どうして、こうもコイツのことが気になって仕方ないのか？

——ああ、どうして。どうして、こうも彼のことが気になって仕方ないのでしょう？

——いっそ、ずっと会わなくて済むように、相手を殺してしまおうか。

——いっそ、ずっと見ていられるように、相手を閉じ込めてしまいましょか。

白と黒は同じようで異なる想いを抱いたまま対峙している。月だけが知っている二人の行く末は——。

1. 日常

「誰もいないな。じゃ、ここら辺でいいか……まあた、お前かよ。暇人か？」

メシッ。

全身も髪も瞳も黒い男性が、電柱の陰から正反対の白い女性を引っ張り出し、呆れながら『黒く変色した』左手でアイアンクローを決めていた。女性を少し持ち上げるかのようにアイアンクローを決めているため、女性の足は地面から離れている。このような光景を一般人が見たら迷わず通報しているだろう。だが、昼間だというのに人通りは少ないのか、二人の周辺には誰もいなかった。

「痛い痛い！ 痛いですよ、クロ！ 死ぬ！ 流石にそれは死んじやいますって！」

「あーあ。何で死なねーかなあ。オレは殺す気でやってるのに。物理的にも『力』的にも」
メシッ。

「あー!! 離してくださいよー!!」

女性がたまらず悲鳴をあげる。女性の『白く輝いている』右手は、クロと呼ばれた男性の左手を頭から離そうと掴んでいる。

「お前がオレのストーカーをやめてくれるなら、いつでも離してやるよ。昼夜関係なく現れやがって。ところで、今は昼間だけだ。お前、仕事はどうしたんだ？」

「無職ですよー！ 株やってますー」

「そうかよ。だからか。毎日毎日飽きもせず、オレに付きまといやがって。凝りもせずしつけえんだよ、このストーカー女。とっとと失せろ。一生オレの前に現れるな」

「せめて、シロって呼んでくださいよー。それに、あなたのことが気になるのです。どうしようもなく惹かれるので、無理ですよーって、痛あつー！」

シロと自分のことを呼んだ女性が強ク締めつけられる度にジタバタと足をバタつかせるように強く抵抗しているためか、クロはシロの足元に目が行き……膝丈のワンピースがめくられて現れた白いショーツがクロの目に映った。

「クソッ」

「痛っ。あら？ クロ、どうしたのですか？」

無造作に降ろされたために勢い余って尻もちをついたシロは、ショーツがクロから丸見えになっていることにも構わずにクロに氣遣うように問いかけた。

「いいから、その白いのを隠せよ。襲うぞ」

クロはシロから顔を背けながら言う。シロは氣づかなかったが、クロの頬は真っ赤に染まっていた。

「あ、あら。お見苦しい物をお見せしました」

白い頬を薄っすらと桃色に染め、シロは慌てて立ち上がって軽くお辞儀をした。

「見苦しくはねえけど……」

クロは誰にも聞こえないくらいに小さな声で、ポソリと呟いた。